2010.1.3

CPU～ チャイコフスキー交響曲第６番ロ短調作品「悲愴」

先日、太宰の「斜陽」の舞台となった屋敷が消失したという。２０世紀の遺物は消滅した。２１世紀はまだ何も創造してはいないのだ。

CPUは、己を攻撃してくるウィルスに対して十分な防備を備え、日々進化を遂げている。カンブリア紀に生じた進化の実験は、恐ろしいほどの浪費を――― この曲の第３楽章のような恐ろしい浪費をし尽くした。それはDNAの気まぐれだったのだろうか。それとも、狂気だったのだろうか。

今、CPUは恐ろしいほどの浪費をし尽くしている。我々は、その浪費を共にし、その先の未来に対して、ある不安を持っている。生き残るのは一握りの数に過ぎないだろう、と。

今世紀においては、生真面目で深刻な努力は実に馬鹿馬鹿しいと見なされている。それよりも、仮想的な世界に浸り、自己を捨て去ることのほうがよっぽど理知的で合理的な解決方法である。

現実とは何か。不況のために路頭に迷う者が居たとして、それが自分にとってどのような影響があるのだろう。あるとすれば、明日はわが身かもしれない、という恐怖だけだ。

我々はCPUに飼われているようなものである。一歩でも、その飼育ケースから外へ足を踏み出そうでもしようものなら、あっという間に途方に暮れ、線路に飛び込まねばならなくなる。 CPUはやがてDNAそのものに侵入するだろう。既にこれは実験の域を超え、生産の領域に足を踏み入れている。

人類は、誕生以来様々な細菌やウィルスに遭遇し、そのたびにDNAを変異させ、耐性を備えていったとされる。しかし、このCPUという特異な「生命体」に対して、どのような耐性を有することができるのか。あるいは、それを制御することができるのか。できるとすれば、CPUを制御することのできる新たなCPUを開発し、その傘下に庇護を求めることぐらいなのではないだろうか。まさにそれこそが、彼らの戦略である。